
いつの日かの記憶（原作：弥生 祐先生『巡りて叫べ！』）

御山野 小判

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

いつの日かの記憶（原作：弥生 祐先生『巡りて叫べ！』）

【Nコード】

N6796E

【作者名】

御山野 小判

【あらすじ】

カンコツ工房先生の、“換骨奪胎小説プロジェクト”の暖簾分け作品です。弥生祐先生から依頼を受けました作品をリメイクしてみました。あらすじは……私は覚えている。いつかあった、あの日のことを。とても恐ろしい、あの日のことを。だけど、それは一体いつの日のことだったのか……。

(前書き)

これは、カンコツ工房先生の、“換骨奪胎小説プロジェクト”の暖簾分け作品です。依頼を受けた作品を新たに作り直す……簡単に言うとリメイクしてみよう、という企画です。今回は弥生 祐先生から依頼を受けました『巡りて叫べ!』をリメイクしてみました。弥生 祐先生の作品とあわせて、是非読んでみてくださいませ。

いつの日かの記憶(原作:弥生 祐先生『巡りて叫べ!』)

私は、あの時のことを覚えている。

もう忘れてしまったかと思っていた遠い日のことを。まだ何も書かれていない、白紙のノートを開き、そのページをただぼんやり見つめていたかのような、そんな日の出来事を。

そう、あれは……、

漆黒の、暗闇だった。人気のない、何かを見ることも出来ない暗闇、その身にまわりつくような、狭く息苦しい暗闇の中、私は必死で何かを求めてもがいていた。そう、温かい家を。真綿のような心地よさに包まれたあの穏やかな家を。だが、そこへ戻ることは許されず……、

助けて！助けて！

心の叫び空しく、不意に何者かの手によって、私は無理やりその暗闇から外へと引きずり出される。

途端に感じる明るい光。眩しささえ感じる程の、強い光。だが、私はそれをはっきり見ることが出来なかった。薬でも打たれているのだろうか、意識がぼんやりと白濁してしまつて、視界の焦点もぼんやりとしてしまつて、光を感じながらも、何かを見えるということができなかつたのだ。

だが、ぼんやりとしか見えなくとも、私ははっきりと感じていた。幾人もの人間が、私をじつと見つめていることを。上から下まで嘗め回すよう、好奇の眼差しでじつと見つめていることを。

そして、そんな私の姿は……そう、裸だった。その、一糸まとわぬ、恥ずかしい姿を、私は私を囲む者達にさらしていたのだ。

屈辱的だった。

そして、恐かった。

その視線が、囲む人々が。

じわじわと胸に侵食してくる、そのえもいわれぬ恐怖に、思わず

私はこの場から逃げだしてしまいたい気持ちになる。そして実際そうしようと、私は立ち上がるべく体に力をいれてゆくが……何故だか上手くそうすることが出来なかった。本当に、これでもかという程、必死で体を動かそうとしているというのに……。

何故、何故、

全く何も、訳の分からぬ状態に、私の頭は混乱する。

そして、わき上がる恐ろしさに、私はただひたすら泣き続け……。

そう、必死で助けを求めめるかのよう、大声をあげて泣き続け……。すると、

「はっ！」

暗い闇の中、私は不意に目を覚まし、ベッドから飛び上がった。

その視界に入ってくるのは、見慣れた私のマンションの寝室。勿論、襲いくるあの得体の知れない恐怖など全くない……。

ようやく戻ってきた現実。その現実をしみじみと実感して、私はホツと胸を撫で下ろす。そして、体中を駆け巡る脱力感と共に、

夢……そう、夢を見ていたのだ……。

しかと確認するよう、そう胸の中で呟く。

すると、不意に隣から、

「どうしたんだ、なんか、うなされてたみたいだけど」

隣で眠っていたかと思っていた彼が起き上がり、心配そうな表情で私にそう語りかけてくる。どうやら私のたてる物音で起きてしまっていたらしい、それに私は申し訳ない気持ちになりながら、ポツリ、

「夢を……見ていたの……」

「嫌な夢か？」

その言葉に私は首を横に振る。

「分からない。でも、すごく恐かった。とてつもなく恐ろしい、過去の出来事……」

「過去の？」

コクリと頷く私。

「でも、いつだったか思い出せなくて……」

そう、こうしていても、まるでついさっきあった出来事でもあるかのよう、あの恐怖はまざまざと蘇ってくるのに。私の体も思わずガタガタと震えてしまうというのに……。

静かに落ちる薄暗い闇の中、間接照明の灯りだけがほのかに灯る、ぼんやりとした不確かな空間の中、お互いの境界すらもあやふやなそこで、私は隠せぬ不安も露にそう思いながら、震える体で思わず顔をうつむける。

すると……それに彼はすぐに私の気持ち察したのか、表情を更に心配げなものにしてゆくと、いたわりを込めた手でその肩を抱き、ギョツと側に引き寄せ、そして……、

「過去は過去だよ、嫌なことなら、無理に思い出さない方がいい」寝間着を通して感じる温もり。その心地よい温もりによろやくといったよう、私の心は落ち着きを取り戻してゆく。

そう、あれは夢、何の害も及ぼさない、唯の幻……。

そして、やがて何とか震える体もおさまると、彼は……もう大丈夫だと思ったのか、頃合をみて、私をベッドへと横たえていったのだった。体の上に掛けられるのは、柔らかな布団。もう眠りにつきなさいと、私に伝えるかのように。それに私は従うようコクリ頷くと、布団の中へともぐり込み、更なる安心を得るべく、彼の側に寄り添って目を瞑っていった。

私に回される、彼の腕。

変わらずそこにある、心地良い温もり。それに私は身を委ねながら、再び眠りへと入ってゆく時を待った。すると……。

しばらくして、意識の深淵へと落ち込む私。そう、またもやってきた眠りの時。そして、避けられぬ運命をその身に受けるかのように、やがて夢も私の元にやってくる。訳の分からぬ恐怖の……そう、あの時の悪夢の光景が。

惜しげもなく皆にさらされるのは、私の裸体。自分の意志とは無関係に、さあ皆さん御覧なさいとでもいわんばかりに……。私は皆の視線を浴びながら、これをどうすることも出来ず、そこから逃れ

ようとでもするように、ただくねくねと身を悶えさせるばかり。

そして、ひたすらその胸を満たすのは……、

恐ろしい、恐ろしい、

だが、どうにも出来ないこの思い。

そうして私はふと考える。

これは……いつのこと？

一体、これは……、

そんな私の上に、今度は不意に何か大きな影が降ってくる。どうやら仰向けに寝かされているらしい、私の上に。これは恐らく……何者かの人の影。

やだ、誰！こっちにこないで！

段々と近づいてくるそれに、私の恐怖は最大限にまで引き出される。

何とかこれから逃れようと、必死で大声を出して泣き叫ぶ。

だが、その抵抗にも、私の気持にも構うことなく、その者は更に体を近づけてきて……そして……、

「ほーら、パパでちゅよ、こっちを向いてくだちゃーい」

「馬鹿ね、あなた。まだ分からないわよ」

一冊のノート。

開けばそこは何も書かれていない真っ白なページ。

これから色々書き綴られるだろう私のページ。

だが今は何も分からぬまま、私はただひたすら泣き続けていた。

了

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

リメイク企画第五弾になります。

今回はオチが命の作品。原作より文字数が増えた……言い換えれば饒舌になってしまった関係上、オチへのヒントが満載で、バレバレだったかな〜とちょっとヒヤヒヤしている御山野です。

オチわかんなかったよ〜と、言っていただけと嬉しいのですが、さて、どうなるやら……。

(あ、ちなみに今回は、二人称の作品を一人称か三人称にとりうりクエストつきでした！)

いつの日かの記憶（原作：弥生 祐先生『巡りて叫べ！』）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6796e/>

いつの日かの記憶（原作：弥生 祐先生『巡りて叫べ！』）

2009年6月29日19時17分発行